

砂川市少年の主張大会



<今月の1枚> 砂川市少年の主張大会

短冊に願いを

今日から7月、最近ではあまり見られなくなったが7月7日は五節句の一つ「七夕」である。「七夕（しちせき）」を「たなばた」と読む語源は諸説あるが、一説には、日本の民間伝承「棚機津女（たなばたつめ）」が取り上げられることが多い。

「棚機（たなばた）」とは棚（横板）の付いた織機で、「棚機津女」は、乙女が水辺の機屋（はたや）に一晩こもって織物を織り神に捧げ豊作を祈るというものである。他の語源としては、「古事記」や「日本書紀」に記されるなどの語句が由来の一つとされている。

七夕の行事内容は、中国から伝わり日本では奈良時代から朝廷や貴族の行事「七夕（しちせき）」として広まったとされる。七夕物語は、天帝が、機織（はたおり）の上手な働き者である娘の織姫（おりひめ）に、対岸で暮らす働き者の牛使い彦星（ひこぼし）を引き合わせた。やがて二人は結婚し、めでたく夫婦となったが、二人は働かず遊び呆けるばかり。おかげで神々の着物はボロボロに、牛は病気になってしまった。怒った天帝は、天の川の兩岸に二人を引き離してしまうが、悲しみに明け暮れる二人を見て、年に1度、7月7日に限り会うことを許した。7月7日に雨が降ると天の川の水かさが増してしまい、二人は川を渡れなくなってしまった。ところが、どこからか無数のカササギがやってきて、天の川に自分の体で橋をかけてくれるという内容である。

国民の祝日に関する法律では、7月の第3月曜日は「海の日」（祝日）と定められている。しかし、2021年は23日から57年ぶりに開催される「東京オリンピック」に対応し7月22日（木）に変更された。今、変異株によるコロナ・ウイルスが世界中で猛威を振るい、オリンピック中止の世論が高まっている。スポーツと平和の祭典であるオリンピックの聖火は、幾度の戦争や東西冷戦等、様々な困難を乗り越え灯り続けてきた。七夕の短冊には「我慢」「感謝」「思いやり」、そして、物語のように無数のカササギが安心・安全なオリンピックのかけ橋となり、「スポーツの力」が分断された世界をつなぐことを信じ、「コロナに勝つ」と最後に記すだろう。

- 1 ささの葉さらさら のきばにゆれる
お星さまきらきら きんぎん砂子（すなご）
- 2 五しきのたんざく わたしがかいだ
お星さまきらきら 空からみてる

※「のきば」とは、漢字で書くと「軒端」、つまり屋根の端で壁から張り出した部分を意味する。

童謡『たなばたさま』は、1941年（昭和16年）3月に文部省発行の「うたのほん 下」に掲載された唱歌である。

（生涯学習推進アドバイザー 奈良 浩幸）